

茶の湯文化学会会報 No.16

第16号 / 1998年1月22日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 〒0805 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

学校教育と茶道

鮫坂 一夫

私は、茶の作法に関しては素人です。今日は、茶道と日本の学校教育にどのような関わりがあるのかを、皆さんと一緒に考えてみるというつもりで参りました。

ぐに言いました。胎動のとき、お産のとき、それからお前がおっぱいを吸ったときだ、と。子どもが胎内にいるときから、教育は始まっています。そのとき母親

何年前に、私は、テレビで奈良公園の鹿のお産を見ました。産気づいた親鹿の産みの苦しみ、そして子鹿の誕生、子鹿が何度も失敗した後立ち上がった親鹿のおっぱいに吸いつく情景、それは、涙なしには見ることできないものでした。私は、あらゆる教育の根源がここにあると思います。



が考えること、することが、子どもに影響を与えます。赤ちゃんが生まれたら、父親もしっかりと抱きしめてやらなければなりません。そこに父と子という関係が成り立つのです。そして、おっぱいを与え、のむということ。母親には愛情がこみあげ、子どもは幸せになります。私は、自分が母親のおっぱいに吸いついたときの気持ちを覚えています。六才まで飲みましたから。おっぱいというものは、あまいものです、あたたかいものです。それは、お茶と

つ頃からこの私に愛情をおぼえたか、と。母は、す

同じ暖かさのものです。どうか、皆さん、これからはお茶をいただけるときに思い出して下さい。これは、お母さんのおっぱいと同じぬくもりだと。

将来人の子の母になる女子学生たちに、お茶に親しんでもらいたいという気持ちから、私は、甲南女子大学で、お茶を正規の授業に繰り込みました。お茶は、美を求め、美をつくり、美に生きる道です。これは、まさに学校教育に取り入れなければならないものだと思はれます。学校は、本来楽しいところであるはずなのに、最近は、学校に行きたくないという子が相当いると言います。いったい学校は、どうなっているのでしょうか。このような今、茶道や花道といった美にかかわるもの、しかも、理屈ではなく、実際に身体を使って自分でお茶を点て、花をいけるといふ感性を土台にしたものを、具体的に教育の内容のなかに入れることは良いことだと思います。理性の力で頭に入ったものは、やがて忘れることが多いです。感性に訴えたものは、長くつづきます。むづかしい理屈は覚えられなくても、みんなと一緒に、お茶の道をつけたということは、強く印象づけられるでしょう。

人間は社会的存在だといわれます。茶室で

は、人は人「とともに」あり、また、人「のために」あります。そこには、不思議な集団力学が存在しています。一定の数の人が、同じ場所と同じものを、ということが茶室ではおこなわれます。そこに生じるいわば「運命共同」という雰囲気を経験するかしなひかは、教育の上で大きな違いになります。今の子は、三十人のクラスで授業を受けます。三十人の一人一人が子どもを一つのクラスで教育するのは、たいへんなことです。茶室では、一碗のお茶を中心にして、「と共に」の教育がみごとに達成されております。今の子は、偏差値でふり分けられて、共同の世界に恵まれません。そのような子どもにとって、同じものをみんなでわけていただく、という茶室の体験は、貴重なものになると思います。

私は、郷里が薩摩です。薩摩の者は、関ヶ原の戦いのことを非常に大事に教えております。島津義弘は、戦いに出る前に、弟の義久とお茶を点ててのんだということですが、お茶には、人間の基本的な力を揺り動かす、決意を促すといったところがあるようです。いよいよお別れのとき、はじめて会ったとき、私どもはお茶によって、根底からゆさぶられながら相手を意識するように思われます。

また、お茶には、あたたかいお茶碗に触れてのむ、ということがあります。ハーローというアメリカの心理学者は、有名なサルを使った実験によって愛情は肌触れて出てくるものだと言っておりますが、私もそう思います。単に外から見たり聞いたりするのではなくて、自分でお茶碗に肌触れて、そしてのみこむ。そこには、きわめて原始的な不思議な作用があります。

茶道は、炭をつぎお茶を点てるというふうな、身体を使うものです。それは、感化の力をもっています。意識することなく、無意識の世界で人間全体が自然と変わってゆくことが感化であると言われております。父や母が日頃お茶を大事にし、仏に供え神に供え自分たちも一緒にお茶をいただく、そういう生活のなかに子どもが生きてゆきますと、意識的にはなしに、意識を超えた世界で自然に子どもが変わってきます。

子どもがお茶にふれるのは、幼稚園からでも早くはないと思います。利休の教えや難しい理論は後から身につけていこうから、お菓子をいただき、お茶をのんで、楽しいと思う気持ち、美しいと思う気持ちを、一週間に一回でいいからもちょうと大切だと思います。

勉強というものは、苦勞なものです。できる

子は楽しいが、できない子はちっとも楽しくない。そのなかで、あのお茶の時間だけは楽しかったということがありませんと、登校拒否、学校拒否というようになってくるのではないのでしょうか。私は、今の日本の教育者には、音楽や美術、また茶道のように体験を通して子どもに感化を与えるものについて、本当に真剣になって考えてほしいと思います。知的な材料だけではなくて、感性によって根源的に人間を動かすお茶に籠もる不思議な教育力というものが、もっと取り上げられることを念願しております。

岡倉天心は、『茶の本』のなかで、世界は日本を武士道によって知るようになったが、それは間違いだ、と言っております。武士道は死の術を教えるが、茶は生の術を教えている。茶に籠もる心が、本当の日本の心だ、と。教育とは、子どもに生きる力を与えて子どもを幸せにすることだと言われますが、その生きる力と茶道の精神ということについて、岡倉天心と一緒に一度考え直してもらいたいと思います。「天心は一椀の茶を前にしてこれこそ人生に美と調和と和楽とを授ける秘法である」といふ。それは美の宗教であるとして

もよい。彼は、絶対の中の絶対、空虚の中の

実体、不均衝の中の均斉を語ろうとする(福原麟太郎)。私達は茶の道の中に、神仏との交流、人間相互の共生、芸術としての美の世界を体験することが出来ます。それは教育の基本と申してもよろしいのではありますまいか。

平成九年度大会報告

平成九年度茶の湯文化学会の大会が、十一月二十三日午後一時より、理事会に引き続きホリデイ・イン京都で開催された。好天のもと、一般参加を含め一一五名の参加者を得た。

中村昌生会長の挨拶のあと、高橋清文氏の「四大茶会記に見る茶杓」、野口企由氏の「場の概念と茶の環境」、桐浴邦夫氏の「紅葉館と星岡茶寮について」、高橋忠彦氏の「宋の詩文に見える茶具」、小泊重洋氏の「いま茶の生産現場で起こっていること」の五本の発表があった。休憩をはさみ鯉坂二夫氏より「学校教育と茶道」という題の記念講演が行われた。

記念講演のあと、別室に移り懇親会が開催され、四十四名の参加者により和やかなひとときがもたれた。

各発表と講演の要旨は次の通り。

発表1

四大茶会記に見る茶杓

―データベース茶杓一覧表による―

高橋 清文

研究内容

この研究は天文十三年(一五四四)から慶安二年(一六四九)までの四大茶会記にある茶杓記事のデータをもとに、名物記「山上宗二記」(一五八八年成立)の茶杓関連記事と照合させて、著名な珠徳作の茶杓等の実体を調査した。範囲は天文十三年(一五四四)から天正十五年(一五八七)の約五十年間に限定した。研究内容は次の二点である。

- 一、珠徳・羽淵・深見作茶杓の本数
- 二、「つき茶杓」の考察

結果

一、珠徳・羽淵・深見作茶杓の本数

○四大茶会記茶杓記事総件数178件(天文十三年(一五四四)から慶安二年(一六四九))

〔内訳〕

(珠徳作91・羽淵作6・深見作2・折りため32・利休5・黒塗4・塗8・作3・芋5・幻齊作1・大坂道悦作1・ぜんそう旧蔵1・みなみと旧蔵1・竹10・象牙4・木3・金1)

○珠徳・羽淵・深見の登場件数 99件〔天文十三年（一五四四）から天正十五年（一五八七）〕

珠徳作象牙	5件	珠徳作象牙	5件
一部記載	16件	珠徳	9件
象	6件	象牙	6件
二ツ目結	1件		
合計	21件		

珠徳作（象牙）7本
 「此外朱（珠）徳之茶杓可有数」
 『山上宗二記』

珠徳作竹	15件	珠徳作竹	15件
一部記載	49件	珠徳・浅茅	4件
珠	29件	徳	9件
竹	7件	つき	9件
合計	64件		

珠徳作（竹）12本
 「此外朱（珠）徳之茶杓可有数」
 『山上宗二記』

一部記載	6件	珠徳作	6件
合計	6件		

珠徳作（材未詳）2本
 「此外朱（珠）徳之茶杓可有数」
 『山上宗二記』
 合計本数 21本

羽淵作竹	3件	羽淵作竹	3件
一部記載	3件	羽淵	2件
竹	1件		
合計	6件		

羽淵作（竹）5本
 「次にはねふちも茶杓削也」
 『山上宗二記』
 合計本数 5本

深見作竹	2件	深見作竹	2件
合計	2件		

深見作（竹）2本
 合計本数 2本

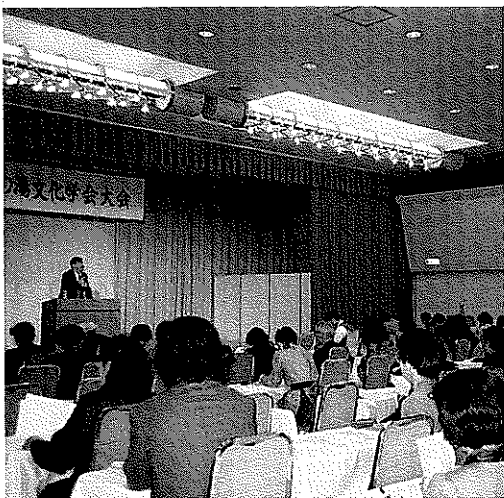
いう規則的な観念は崩れて、「折りため」が主流となる。このことは、『山上宗二記』の成立年と推定される天正十六年（一五八八）と一致し、よって、「右両作当世はずたり候か如何」「此比ハ慶主座折りため能候」の事と一致する。

発表2
 場の概念と茶の環境

―現代デザイン教育への効果的導入―
 野口 企 由

現代のデザイン教育の中に日本の古来から受け継がれてきた感性を盛り込んでゆくことは、国際化が烈火する中で他国に負けない我が国の独自性を維持、助長する面において重要な意味を持っています。そしてそこには様々な方法論が開発されなければなりません。その中のほんの一角ではありますが、私は茶室やそれを取り巻く環境から学ぶ諸点を現代のデザイン教育に柔軟に応用できる方法論を模索しています。

茶の環境を日本の歴史的資産として伝えることは非常に重要です。しかしそれだけでは多くの学生は活発に反応してきません。なぜなのか、考えた時、そこには、「君がそれを



これからも持続してゆく日本の伝統の一部として今どのような視点で分析するのか、またどのようにこれからのデザインに活用できるのか」という現在進行形での問題意識や指針の投げかけが不足していることに気がつきました。

そのための方法論の中で、場の概念の導入というものがとても有効なものではないかと考えています。場とは空間と混同しないように理解します。空間が人間やその他の環境要素を意味のある活性化がおこなわれている過程や状態をさして位置づけます。こういった活性化の裏側には人間の様々な意図や行動と事

二、「つき茶杓」の考察
 「つき茶杓」記事総件数 九件〔永禄二年（一五五九）から永禄六年（一五六三）〕
 推定件数 三件〔天文二十一年（一五五三）から永禄十一年（一五六八）〕
 合計 十二件

○「つき茶杓」とは名物茶入に添う珠徳作茶杓の名称であると推定できる。この名称は「天王寺屋会記」（宗達自会記）にのみ見える記事であり、この茶杓が使われている茶会には永禄六年正月九日朝（一五六三）を除いて、すべて北野肩衝（宗及自会記・永禄十二年五月二十六日昼の茶会記事他）に使われている。○データーを見てもわかるように数件の例をのぞいては、同じ珠徳作の茶杓が同じ名物茶入に規則的に使われている。『山上宗二記』にも「紹鷗所持茄子ノ茶杓也」とあり、名物茶入に規則的に添う茶杓があったと推定できる。

○しかし、データー上では珠徳作茶杓は天正十五年（一五八七）正月三日朝秀吉茶会を最後に見られなくなり、天正十五年十月十四日昼秀吉茶会に、新田肩衝に対して「折りため」が使われているように、天正十年（一五八七）以降、名物茶入に対して珠徳作茶杓がごとく

物や空間との関係構造が潜んでいます。そして場の度合いが濃くなればなるほど人間はその環境を親密に感じ、それと同化します。これらを解明してゆくことは、人間的に豊かな環境を創るための本質論に通じる部分でありますから、デザインの非常に意味のあることとすし、高い応用性が期待できます。

茶の湯が建物や庭園や事物のデザインを包含する人間の創造的活動の調和を目的としているならば、それが行われる環境を親密な場をデザインするためのモデルとして観察、分析することが可能なはずで、そして場の観点から様々な断面を抽出することができはるはずで、そこに日本の将来に向けたデザイン的应用性と新しい教育的価値が見出せるのではないかと考えます。

発表3

紅葉館と星岡茶寮について

―一八八〇年代の数寄屋―

桐 浴 邦 夫

研究の目的 一般に明治の初め頃は茶の湯にとっては冬の時代と考えられてきた。しかし一八八四（明治十七）年に星岡茶寮が茶の湯を基本とした社交施設として開設され、また

その僅か前の一八八一(明治十四)年には紅葉館の開設があった。この紅葉館は当初茶室を持つものではなかったが、星岡茶寮の設置計画と相前後して茶室の増築が行われた。本研究の目的は、この時期に注目し、紅葉館および星岡茶寮が計画され建設される経緯、そしてそれを取り巻く状況を明らかにすることである。

紅葉館 紅葉館は一八八一(明治十四)年に東京芝公園の楓山に建設された。ちょうど現在の東京タワーの位置である。一八八一(明治十四)年と一八八三(明治十六)年には茶室の増築計画が確認され、後者は利休堂であると見られる。また文豪尾崎紅葉は常連の客として知られ、『金色夜叉』のモデルともいわれている。しかし一九四五(昭和二十)年戦禍により焼失する。

星岡茶寮 星岡茶寮は一八八四(明治十七)年に東京麹町公園に建設された。一八九〇(明治二十三年)には利休の三百年忌が行われた他、東京茶道会による使用が確認され、茶の湯の用に供していたことが理解される。後には幾たびかの所有者の変遷が見られ、一九二五年(大正十四)年より北大路魯山人と中村竹四郎の所有となったが、戦禍により一九四

五(昭和二十)年焼失した。

明治期における公園 日本における近代の公園は西洋のそれを目指したものであるが、成立の直接の契機は旧来の景勝地の私有化を防ぐことであり、その保全にあった。また東京府では独立採算性による公園経営が考えられていた。そのような状況において紅葉館と星岡茶寮は成立したのであった。

一八八〇年代の教寄屋 紅葉館は開業直後に茶室の増築を二度に亘り計画している。これは、この時代において茶室の需要の急激な高まりを示すものと考えられる。また両者における利休堂の存在は、当時の利休への関心の高さが偲ばれる。

発表4

宋の詩文に見える茶具

—茶臼と茶瓢を中心として—

高橋 忠彦

宋代の茶具の具体的な形状と使用法を伝える文献としては、『茶録』『大観茶論』などが存在するが、唐の『茶経』に比べると、繊細さを欠く。しかし、幸い、文献に見られる宋代の茶具のなかには、その実態が不明な物もまだ多い。今回の発表では、『茶臼』と『茶瓢』

を取り上げて検討したい。

まず、『茶臼』であるが、『茶経』に記される「臼」は、製茶の道具であり、蒸した茶葉を搗くものであった。しかし、それとは別種の「茶臼」が宋の詩文に散見し、おおむね茶を飲む場面に用いられている。特に詳細を極めるのは、秦觀の「茶臼」の詩であり、茶人が設計した美しい形状の茶臼で、団茶を砕くという内容が読み取れる。この茶臼は『茶具図贊』に記される「木待制」に当たるものと思われる。ところで、「木待制」は、従来「砧椎」と解されることが多い。「茶臼」と「砧椎」は、機能としてはあまり変わらないかもしれないが、「臼」の表現に注目すれば、これが単なる台でなく、くぼみをもった器具で、その中に茶団を入れて砕くものではないかと推測される。「木待制」の図も、このように理解できるし、『五百羅漢圖』(大徳寺蔵)に描かれる、これに酷似した道具も、「茶臼」と見ることができる。

次に「茶瓢」は、宋代において、「茶僧」の異名を持ち、方岳の「茶僧賦」という作品が残っている。『茶経』における瓢の用途は、割って柄杓とするものであるが、この賦を詳細に検討すると、割らずに用いている。とこ

ろで、『茶具図贊』の「胡員外」という道具も、瓢であるが、賛の内容から考えると、茶を磨る道具であり、これが「茶僧」に当たるのではないかと推測され、宋代においては、抹茶が固まったような場合に、このような道具が用いられたものと考えられる。

発表5

いま茶の生産現場で起こっていること

—お茶の味と肥料—

小泊 重洋

緑茶の呈味構造は、中程度の渋味、うま味、苦味と弱い甘味から構成されている。更に、香気も嗜好においては重要な要素となっている。緑茶の旨味成分中、最も含有量が多いのはカテキン類であり、約15%含み、これは苦味、渋味を呈する。苦味を持つカフェインは2~3%含まれる。うま味や甘味のもととなるアミノ酸類は約20種類ある。そのうち最も多いのがテアニンであり、これは上品なうま味と甘味を持つ。煎茶は本来、「渋味とうま味が調和し、後味に清涼感を与えるのがよい」とされてきた。しかし、近年、上級茶指向が進むにつれ、うま味の強い、即ちアミノ酸類が多く、カテキン類が少ないものが望まれるよ



うになった。特に、茶特有の成分であるテアニンが多いほど高品質であるとされ、この多肥栽培の傾向が一段と強まった。その結果、硝酸態窒素による地下水汚染や亜酸化窒素揮散による地球温暖化問題へと波及し、農業外からも問題視されるようになった。現在、各茶生産原で指導している窒素の施用基準量は10a当たり40~90kgであるが、農家では平均で24%程度多く施しているのが実状である。

一方、水質汚濁防止の指針値として示されているのは、硝酸性窒素として10㎖以下である。現状の施肥量ではこの値を常に下回ることは困難と考えられ、量の引き下げも必要になる。その際には、各種の施肥管理技術による対応には限界があり、茶の味そのものの見直しにも及ぶ可能性がある。香りとともに煎茶本来の味の特定を考える必要に迫られ

理事会報告

平成九年度の第二回理事会が、大会当日の十一月二十三日(日)十二時から、ホリデイ・イン京都で行われた。出席理事は十四名。中村昌生会長の挨拶に続いて、平成十年度の事業計画や各種報告が行われた。

事業については、総会を東京、大会を京都、例会は近畿と東京で行い、研究会については京都と山口で開催する方向で検討中であることが報告された。

また、二〇〇一年に静岡県主催で、緑茶の国際イベント「世界お茶まつり(ワールド・グリーンティ・フェスティバル)」が計画されている。これに先だつて一九九九年十月にはフォーラム等が予定されており、静岡県並びに小泊理事より茶の湯文化学会にも協力の依頼があった。これについては、できるだけ協力する事となった。

その他、学会事務局と各地の連絡方法などについて討議し、理事会は終了した。

研究会のご案内

第八回の研究会は、平成十年二月二十二日(日)に東京の五島美術館で行われます。会員の皆様のご参加をお待ちしています。なお、研究会につきましては別途ご案内いたしますが、内容は左の通りです。

日時 平成十年二月二十二日(日)

午後一時より

*会員の皆様にはすでにご連絡しておりますが、当初お知らせした日程とは変更になっておりますので、ご注意ください。

場所

五島美術館(〇三三三七〇三〇六六二)
東京都世田谷区上野毛三一九一二十五

報告

- 一、谷村玲子氏(国際基督教大学)
「井伊直彌の茶の湯」
- 二、矢野 環氏(埼玉大学)
「『玩貨名物記』の書誌―君台観左右帳記』の系譜から見ること」
- 三、木塚久仁子氏(土浦市博物館)
「『土屋蔵帳』と土屋氏」

特別講演「母なる文化」と茶の湯」

山村賢明氏(文教大学)

参加費 会員五百円・非会員千円

(当日、受付けて頂きます)

例会のご案内

東京例会

昨年に引き続き、以下の日程で午後二時より東京学芸大学(小金井)講義棟S二〇六を会場として行われる予定です。

一、平成十年三月二十八日(土)

「茶の湯における懐石の系譜」

谷村 玲子氏

中央線「武蔵小金井」駅下車。京王帝都バス(小平団地行)学芸大正門前下車。

近畿例会

近畿例会は、これまで同様、京大会館(京都市左京区吉田河原町)を会場として午後六時三十分より行われます。

一、平成十年三月六日(金)

シンポジウム「茶の湯と自然」

中村 昌生氏他

シンポジウム形式で、建築、美術、歴史、茶事の各方面から「茶の湯と自然」にアプローチします。

発表者の募集

大会・研究会の発表者を募集しています。平成十年度には、年一回の大会と二回の研究会が行われる予定です。

大会は一報告につき、報告二十分、質疑応答十分。研究会は報告六十分、質疑応答十分程度です。

発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡下さい。ご連絡に際しては、大会・研究会の三ヶ月ほど前に、八百字程度の梗概を大会、研究会応募の別を明記して、事務局までお送り下さい。

事務局報告

※平成九年度大会での記念講演要旨を巻頭に収録させていただきました。

※会報十五号掲載の滝口明子氏「イギリスの喫茶文化」におきまして次の箇所誤植がありました。お詫びして訂正致します。

「浮かびあがってくる」を「浮かび上がってくる」、「ケンベル」を「ケンベル」、「作形形成過程」を「作形形成過程」、「茶の文化比較のためにいくつかの」を「茶の文化比較のためにいくつかの」

※昨年十一月二十九日に東京例会が行なわれ、中村修也氏による「茶西以前の茶の湯」の報告がありました。次号で概要をお知らせします。